

彙 報

●京都帝國大學史學科國史專

攻學生名古屋方面研究旅行

本學史學科國史專攻學生の春季研究旅行は去る六月十七日十八日の兩日にわたつて名古屋市に試みられた。一行三十名、三浦教授指導の下に古社寺、舊家及び史蹟を歴訪して或は古文書記録を讀み耽り或は古美術に陶酔しつゝ、各自の研究慾を飽滿せしむることが出來た。今左にその梗概を叙して見る。

六月十七日、午前〇時五十七分京都驛を發した一行は五時三十一分名古屋驛に着き先着の三浦教授及一行の爲めに東道の勞を執らるべき同市出身の文學士若山善三郎氏等の出迎を受け、直に中村公園へ向つた、園内には秀吉を祀つた小祠や、秀吉誕生の地と傳ふるところがあり、そこから程近き太閤山常泉寺の境内にも秀吉誕生の井戸といふのがある。只それと前の誕生の地との距離は

餘りに大にすぎる爲藤吉郎其人の誕生地としては疑はれる。更に小出秀政や木下長嘯子の宅址といふを過ぎりて清正の邸地と傳ふる妙行寺に入る。もこは稍東にあつたのを清正築城の餘材を以て現地に移したと傳へられる。そこから一行は電車に乗つて七時四十分七ツ寺に着いた。本堂は桃山時代の建築である。(特別保護建造物)平安中葉の作と思はれる阿彌陀三尊及び鎌倉時代の作なる持國天毘沙門天の立像が安置され、又一切經が置かれてゐる。(以上國寶)其中大般若經は最も特色あるもので、今は箱の中に冊子となつてをさまつてゐるが、もこは卷子本であつた。卷末には木版で次の如く記されるものが多く、其最後には寫經者の名を署してある。

奉預勸請 守護權現

伊勢内外梵尊 五取本山

白山妙理熊野三所山玉山聖

鎮守三所多度津島 南宮千代

大行事

熱田大明神八劍大明神

經箱中蓋の裏に一秩十卷を限つて一人で書寫し、一人數秩を書寫する事は願主の本願でないこの事が書かれてあるが、各秩を開いて見ても、例へば卷十は大法房、卷七十は花嚴房榮義、卷三百四十は慶光、卷三百八十は鏡妙房、卷五百八十は七郎房、卷六百は定善房の書寫まつてゐる。猶他本と校合してあるが、その場合校合者は同時に筆者なる事があり、同一人で二秩以上にわたる事もある。慶光はその一例である。又三本一校等もあるものには原の經典異本の所有主を第一秩の如く何々家本何々本として擧げてあるものが見える。校合者は殆ど同時代の人達である。此經は紀ノ安長が天下の能筆に書寫せしめたもので經の最尾に「願主、從五位大中臣朝臣安長」の木版が捺してある。かゝる經が六百卷あるが、その經箱の中蓋の一つに「安元元年乙未正月十五日始、同月二十日遂之」とある。中蓋は計六枚で裏には文字又は十六善神を畫けるもの等があり、小箱には金銀泥を以て蓮を描いてある。他は一切經で堂内向つて左側に置かれてゐる。經には繼目に繼目黒印のあるものがある。又一切經

の中蓋には一合以上を借受くべからず抔の注意事項を載せてあるがその文字は治承二年の日附に違はず當時の字體書風の特長を明示してゐる。

一行はこゝを辭して寶生院眞福寺に向つた。其建物中書院庫裡經藏の外は明治二十五年の大火に燒けた後の新造である。書院に於て所藏の國寶其他の圖書を陳列して仔細に閲覽した。各古寫本類は夫々「寺社奉行官符再照」なる圓黒印又は「尾張國大須寶生院經藏圖書寺社官符點之印」なる矩形朱印を捺してある。文政四年九月寺社奉行より修理せしめ更に天保十一年再點檢した物である。夫等の圖書は餘りに學界に周知されてゐるから詳説を略するが今其二三を擧ぐれば漢書食貨志一卷は裏なる阿彌陀經疏に嘉保二年九月の奥書があるので其年代が推知される。瑠玉集は卷十二及十四に各天平十九丁亥の年に寫すこの奥書があり早く支那にも亡びたもので此書として最古のもの云ひ得る。有名なる賢瑜華古事記三帖は下卷の跋に文永三年三月仲旬書寫畢と見え大中臣定世の印が捺してあるに目を引かれる。又承徳三年正月の奥書ある

將門記、正中二年八月の奥書の尾張國解文、永萬元年十月の奥書の七大寺年表は何れも殘闕であるが我等に取つては古事記と共に親み深いものである。書風より推して平安末のものご考へらるゝ日本靈異記は中下二卷あり、高野山なる上卷ごあはせて完璧をなすものである。源爲憲の撰なる口遊は弘長三年二月の奥書及左親衛相の序がある。又弘長六年の奥書ある倭名類聚抄には白拍子玉玉の身請證文杯の紙背文書に興味を引くものがあつた。更に宗教關係のものごして熊野權現に關する古書、空也上人に關するもの、往生傳及び弘法大師に關する多くの卷子本冊子本がある。その時代は何れも平安後半期より鎌倉南北朝の時代へかけてのものである。而して南北朝時代に屬する者の奥書のすべては北朝の年號が用ひられてゐた。弘法大師御入定勘決記の跋語は那古野なる地名の初見ごして注意される。其他翰林學士詩集は唐の高宗以後我延喜以前のものらしく、裏には表利集第五なる文字が見える。

一行はこゝで當市の堀江瀧三郎氏の好意を以て齋ら

された文書數軸を見た。正親町天皇宸翰は當時安土に居つた信長に向つて、其努力を嘉賞されたものであり、又兼實自筆の願文は紺紙金泥に書かれ文治五年九月二十八日興福寺南圓堂の不空罽索觀音安置の時のものである。其文は玉葉に載せたものに比して多少の出入はあるが、これが最後の眞蹟たるこゝ言ふ迄もない。細川忠興の書狀はその印に忠興の羅馬字を用ひてゐる。其他に徳川頼宣より義直に宛てた二月十五日附の書狀は、兩人の親善さが窺れるものであつた。午後〇時二十分、一行は情妙寺に向つた。寺は豪商茶屋氏の交趾支那貿易圖を藏するを以て知られてゐる。茶屋氏はもご京都三大吳服商の一、名古屋のはその一分家で、徳川家の用達商人であつたが、子孫は中島氏を冒して今に續いてゐる。圖は近世の初、其祖四郎次郎が幕府の渡航印信を受けて交趾に渡航したミキのもので、實物は縦二尺三寸八分、横一丈六尺六寸二分、淡彩を施してある。我國史研究室にも其模寫はあるが、一見してエキゾティックな點が目につく。而もこの圖のよく實況を描き出されたものなる

事は圖の左方の遼磨座禪石や水牛耕作等の現状と異らぬによつて知らるゝといはれる。此圖と同時に示された茶屋氏の系圖、由緒書及び系譜で茶屋氏が小笠原氏より出た事、及茶屋氏と義輝家康等との關係を示してゐる。

一行は更に同寺墓地の茶屋氏祖先の墓を展した後、建中寺に向つた。建中寺は徳川家の香華院であるが、墓地の入口に近く清の歸化僧陳元贊の墓がある。こゝには藩祖義直を除く外歴代の墓があつたが形式は稍異なるものもある。面白いのは宗家の忌諱に觸れて失脚した七代宗春の墓に金網を被せてある事である。次で鑿屋に詣で、又寶物を觀た。慶長五年五月七日光友の建中寺法式、蒙古襲來繪卷の精密なる模寫等があつた。

一行は三時過總見寺に着いた。こゝには織田信長及其一族主従の書狀數通を藏してゐる。地子免除に關する信雄の天正十一年五月十七日附の書、家康へ宛てた三月十六日附の同人の書狀、八月二十四日附の信孝の藍印ある書狀、佐古殿御陣所宛十六日附の一盆の書狀等がそれである。五月二十三日附秀吉の書狀は高松城水攻の一史料

として船を對岸へ引取り水攻にする意味が注意される。

常真より山三郎に宛てた書狀も、大阪の能に關する者で面白い。又永徳同常信の筆及び信雄作と傳へらるゝ二幅の信長畫像と清洲の壁紙と傳ふるものもあつた。後者は松に鳥が二幅、梅に鳥が二幅で其用ひてある金粉はよく時代を現してゐる。箕を捨てたる男を描ける諷刺畫の額は「此圖者總見寺殿贈一前大相國公近州安土城之額也」と記されてゐるもので有名である。終に信長の墓に詣で、是日の最後の豫定なる名古屋圖書館に向つた。四時三十分圖書館に着いた一行は、先づ箕形鐵太郎氏に導れて一行の爲めに多數の圖書の陳列された一室に入り同氏の説明を聞いた。吉見幸和自筆の恭軒職原抄講義秘録にはその神道の師壺井義知の附箋が多いから義知の講義の筆記らしい。幸和の子幸混自筆の萬葉集解一冊、神學者眞野時綱の神代講習抄、天野信景自筆の中臣跋祝詞管豹抄、河村秀頼の學壽筆叢十四冊及び續學壽筆叢三冊りん、に注目される。河村秀根の書紀集解は自筆の稿本が初稿から假名を抜き漢文體にした二稿等が出てゐる。その校

正本は四卷ある。書紀類註一冊は其原本らしい。同じ秀根の延喜式群瑞式史傳一冊、同考證一冊、職原抄後附一冊、職原抄祕解四冊及び多くの附箋を貼つた延喜部各式集解一冊があつた。其子益根の久米舞考證一冊は一時絶えた久米舞の歌詞を、眞清田社司の再び得たので考證したものである。令の研究の完成を見ないで没した神村正鄰の神村隨筆、其養子忠貞の禁祕抄註解八卷及びその朱點句讀を施した禁祕抄一冊もある。松平君山の吉蘇志略三冊、松平雜記一冊、横井也有が友人に募つた七景の詩を自筆で書いた知雨亭七景詩一冊、自筆の少い細井平洲寫の建官考一冊、正鄰の門人山高信順が師の遺志を繼いで著したここの序文に見える禁祕抄考證稿上中二冊、國學者鈴木眼の歌稿六冊、同じく籙屋文章、弟子の謝菴遺稿、深田正韶の尾張志草稿一冊等何れも趣味あるものであつた。金城温古録は目録以下凡例篇御天守篇御本丸篇御深井丸篇二ノ丸篇御城篇御深井御庭篇三ノ丸篇及び追附拾遺篇を計六十四冊よりなるものであり、記事頗る詳密、著者の苦心を察すべきものである。其他繪圖には熟田神

宮年中行事繪圖、享元繪卷(寫)があつた。斯くて一日の行程を終へて岐阜長旅館に旅装を解いたのは六時であつたが、やがて名古屋在住の本學文學士會の先輩と晚餐を共にし終つて茶話會を催した。先づ市村文學士の歡迎の辭を受けて三浦教授の答辭があり各自自己紹介と共にその抱負感想等を述べ交して歡談の高潮に達した頃閉會した。

十八日、一夜の熟睡に旅の疲れを癒し得た一行は九時前宿舎を出て名古屋離宮へ急いだ。殿舎は、慶長十九年前田外世諸侯の命を承けて、工を竣へたもので其立關は昔ながらの駕籠寄である。其正面二ノ間二十八疊の唐紙の繪は貞信の筆で虎及豹を描き、其西一ノ間には山樂の繪、床袋には百合朝顔をあらはしてゐる。其西板ノ間には山樂の名畫八方睨の虎を描いた障子が置かれてある。三ノ間は麝香の間で永徳の畫、二ノ間は同じく永徳及び光興の筆である。上段の間は藩公の座所であるが、その東に武者隠しの間があつて大名の日常警戒振が窺れる。こゝの繪は光興である。その案の床が長さ二間厚さ

四寸七分にわたる一枚板であるのを見て結構の壯觀を知
るべきである更に對面所は西に東にに分かれ何れも岩佐
又平の風俗畫西は京都の年中行事及風俗を描いたもの東
は大阪のそれである。いづれも精巧なる密畫で當時の行
事風俗を見るに好參考ならう。猶西の間の天井は二重
あがりの合天井、三十數回の塗磨をした程のものである
其他興意筆雪中の柳に鶯の繪ある鶯の廊下の北には梅の
間と呼ばるゝがあり、興意筆なる大幅の梅の繪はその氣
品の高き構圖の巧みと共に無類の傑作である。やがて出
で、北に更に西まがりに金城へ進む。石垣のみにても
地盤より六十尺あり、閣は五層より成つてゐる。第一層
に於て南北二十間東西十八間の大なるもの大鯪は濼然こ
輝く。石垣は清正の家臣飯田覺兵衛の組方によるもの角
の大理石には加藤肥後守と彫つてあるのが見える。天守の
西にあるは清洲城を移したものである。其中を通つて天
守に入る。門の鐵板は叩き伸ばしたものゝ聞いた。入つ
て左に黄金水の井戸と叫ばれる井戸を見て第一層に昇
る。陰氣に暗い中を驚く程太き梁を見ながら二層へ。其

所には各方面に長方形の穴がある。防戦利あらずして廻
り來る敵をこゝに待受け熱湯を浴せる所といはれる。頂
上五層に達すれば地圖代用の三尺一寸八分に四尺の板が
備へ附けてある、中央より數個の同心圓を放射線を書き
こゝから遠望すべき方向距離及び地名を書入れたるも
ので、誠に珍らしく覺えた。殊にそれがもこ長持にをさ
められて開くべからず記されてあつた事を聞けば猶更
興味が深い。こゝの周圍にある檜の柵板の戸は絹絲柵の
非常に珍しいものである。天主より見れば濃尾の平野
を越えて周圍の山河一目にして判然、敵の攻寄する様も
忽ちにして看破されよう。一行は閣を降つて幾度かその
英姿を見返りつゝ、十一時過徳川侯爵邸に到着した。

徳川家に於ては午餐の饗應を受けた後一行の爲めに特
に陳列された貴重の家寶を展觀した。先づ駿河御分物御
道具帖なる目錄一冊に據つて元和三四年頃の讓與に知ら
れた。殊に我等の興味を引いたのは其御道具帖中駿河御
分物納品帖の所に「銅五千五百二十貫目、中目、二百六
十八箱、一箱十五貫目宛入」と記され其他にも鐵錫等の

見える事であつた。別に駿河御讓御書目錄一冊がある。これは家康より義直へ遺贈された書名を列舉したもの、卅九番に分けて載せられてゐるが、其中には唐本朝鮮本も多く殊に後者の多きは注目された。今其主なるものを舉ぐれば宋版聖惠方及補寫五十二冊正誤二冊、齊民要述十卷、元版中州集、明版春秋傳大全十冊、朝鮮版資治通鑑綱目、嵯峨本方丈記等である。聖惠方は金澤文庫舊藏本であつて、其補寫も足利末期を下らぬ者である。齊民要述も亦金澤文庫本であつて、卷十の文永十年三月十一日金澤實時の跋に京都から小川僧正の本を借りて寫したこの本書寫の由來を記して居るが、同じ一、四の奥には建治二年正月十五日(卷四では後三月九日)以近衛羽林借賜之摺本校合了と見えるから本書は金澤文庫に入つた後も校合を續けられたものに見える。此奥書は卷一、四のみに見える事が、内容を見れば諸卷皆摺本に據つて校合してないものはない。而も特に此書が一行の興味を惹いたのは鎌倉時代文永前後の紙背文書である。先づ卷八には平岡左衛門尉宛及び越後守宛のもの數通があり、又上部

下部は缺けて居るが其中に關東御式條案として註に「弘長二年可停止山僧寄沙汰申事」この貞永式目追加が見える。其他上部下部のなき文永頃の解狀、□氏重陳狀等があり、文永六年六月十日蓮聖書狀案には「於父祖之負物者請繼其跡之輩致辨□(之歟)事」もあり當時の法制研究に資すべきものである。同じく卷八には一行が後刻訪問すべき熱田加藤家の祖先に關係の文書と覺しき景經の父西阿の遺領につき□氏の再陳狀がある。それには西阿の延應の讓狀を變改したこの景經の訴を否認してをるのである。卷九の裏文書にもそれと關聯して景經が嫡子なるに拘らず有名無實の地を讓られ繼娘が遺領を受たこと主張する事についての裁許狀がある。吾妻鏡に見えた景經の末路を思合すべき一資料として面白い。同じ卷九卷十には石清水八幡宮領出雲國横田莊から春分の御公事領錢鐵五十貫、秋分の鐵五十貫を送つた事が見えて居るが、これ亦經濟史上の一好史料たるを失はぬ。其他卷十の閏五月二十九日菊池武彦書狀は當時元に對する警備の爲め幕府が西國に於ける御家人の足留をした事實が確められる

ものである。一行は更に後庭に出で二代光友誕生の家を見たが、位置は稍昔と異なるに聞いた。其前庭には、朝鮮役に將來したさいふ燈籠一對があつた。こゝにて記念撮影の後徳川家を辭して政秀寺に向つた。

寺は織田氏の忠臣平手政秀の爲めに建てられたものである。一行は先づ其墓を拜し次で本堂に入つて古文書を見た。名護屋陣への見舞を謝した五月二日附秀吉の朱印、澤彦より雪岩宛の自筆書狀等が目を惹いた。

三時一行はこゝを辭して、直に熱田に向ひ三時半熱田神宮に着いた。門を入つて北にまがれば向ふに特別保護建造物なる海上門が見える。其手前東側の寶物館に入れれば陳列箱に多くの文書書籍等がならべられてゐる。後花園天皇の尾張國熱田社領の事に關する永享五年十二月十二日の宸翰や足利義教の内書がある。馬場家舊藏文書には熱田神宮の總建立を勸進させずして専ら秀頼に寄進させる様々の家康の旨を傳へた卯月五日の清正の書狀が目を惹いた。其他、文明十一年三月日永和三年霜月四日の日本書紀奉獻狀がある。有名な日本書紀は卷一上神代

紀及び第三神武天皇紀が披れてゐた。この紙背には爲重、淨阿等の歌があり、夫れ等の和歌を河村秀根が數人會して一冊に書寫したものが熱田社書記卷脊和歌で跋語に「右一卷明和七^庚年七月廿三日於熱田神社暴涼之日稻葉通邦山形信記粟田知周兒益根等倉卒書寫後清書之而難解者多但恐有寫誤而已、河村秀根」^三と見える。其他菅公神像は天文二十二年六月織田信勝の寄進したものである。一行は本殿に詣で末社攝社に巡禮して後加藤景美氏の邸に向つた。

同家では階上の一室に一行の爲め特に家寶を開陳されてゐたが、中に桶狭間の役に信長より拜領の盃、家康の人質として當家に預けられし頃使用の硯や玩具、家康より拜領の印籠等々があつた。明治八年製作された加藤家及び其の周圍圖を見て當時迄尙この地の島であつたことを知るに同時に信秀が家康を當家に幽囚した理由についても暗示を得た。この島の漁夫はもと同家の家人であつたが、今は獨立したさいいはれる、當家には織豊一氏より徳川に至る間の多數の文書を藏せられてゐる。山口孫八

郎の後家の爲安堵の事を認めたる十月二十日の信長の書狀には其初期の花押が捺されてある、これを前にしては弘治三年八月十三日の信定書狀を始め、天文二十二年十月日の信勝、弘治三年霜月二十五日の信成、天文二十三年十二月の達成の免許狀等何れも織田氏の先代のものである。光圀より尾陽侯宛の書狀は西山隱居後義直に與へた自筆の謝狀である。又商賣上の徳政貸借賣買に關する安堵狀として織田達勝、信秀、信長、信忠、信雄、家康より受けた略同文がある。家康、義直、加藤嘉明、蒲生氏郷、蜂須賀家政等の書狀も見られる。一行は加藤家を出で、有名な熱田の裁斷橋の遺趾を訪うた。若くして逝いた不幸の子を思ふ堀尾金助の母の親心に深き同情を有つからである。見るに、橋は名のみで今は唯擬寶珠の柱のみが川の埋められたあとの路上に寂しく立ちて氣づかねは見落すばかりとなつてゐる餘りの變りかたに、一行はしばし立ち盡くして顔見合すのみであつた。

かくて天候に恵まれ乍ら短時日の間に豫期以上の收穫を贏ち得た旅行の日程はこゝに終りを告げたから、一行

は心からなる愉悅にひたりつゝ、疲れた足を熱田驛に向け、午後六時三十五分發の汽車で歸學の途に就いた。

最後に一行に向つて到る處多大の好意を寄せ便宜を與へられた各位、殊に兩日に亙つて周到なる用意の下に懇切なる嚮導に預つた若山文學士に對して衷心の感謝を表して筆を擱く。「大熊」

● 史學 研究會

例會 六月二十三日午後一時半から本會例會を樂友會館樓上に於いて開催した。

西佛旅行談

文學博士 濱田 耕作氏

此春歸朝の博士は西班牙及佛蘭西に於ける考古美術方面の諸遺跡を歴巡されし興味ある巡遊談を約二時間に亙つて詳述され多數の標本陳列と共に來會者に多大の感興を與へるものがあつた。

● 讀 史 會

例會 四月二十七日午後六時半より學友會館第一號室に於て新學年最初の例會を開催。三浦黒正兩教授中村助教

授以下會する者四十四名。左の如き研究發表があり十時散會した。

義仲の子孫に就いて

小島 眞君

生前敗殘の義仲は頼朝よりも子孫即自己の延長なる點に於て更に幸福者であつたといつて義仲の子女についてのべ、木曾家の安曇更科其他を領した經過及び信州下伊那郡高遠地方の占有に義仲以下高遠氏木曾家との關係、義仲十八代の孫義昌の武田氏滅亡に對する功績、其子孫が天保四年頃迄確に存在せし事、更に今日の確實な一族は千村中山二氏である事を説き最後に義秀の所生に其亡命傳説に言及した。

近世農民の疲弊

船津 勝雄君

徳川時代の封建制度は土地が生産資本で武士はこれに依つて支持された丈農業は彼等にまつて缺くべからざるものであつたから一面に農業を重じ乍ら他面には農民其者を生産手段と見て其日常生活を嚴重に拘束し、殊に土地經濟維持の爲經濟知識の發達を阻止せんとした。然し都會に於て漸く盛に用ひられ出した貨幣は元祿頃から農

村に入り自給自足から町人の手を要する交換經濟となつた。且町人の財力は農村に及び土地兼併新田開發により町人の地主も出來一方町人の農民への資金融通は農民の困窮を加へ農民自身亦經濟生活の向上を欲望に依つて奢侈の風を生じた。一方商工業の發達は著しくなつて來て農民のこれに侵潤するもの漸く多く農民は益々疲弊を來した云々。

徳川時代の賃銀

文學士 岸本 準二君

賃銀授受法の一は自由意志による普通雇傭制度請負等で他は幕府公權の強制勞働個人間の人身賣買に伴ふ勞働提供の如き不自由勞働である。次に年期にも百姓等譜代奉公より日傭人まで種々あり更に職人日傭等の勞働の種類に依つても差異を來したが今主として自由勞働制の雇傭制度につき見るに賃銀決定法は多く合意の相對と云ひであつた。唯注意すべきは幕府により往々最高賃銀の決定された事で時には又同業者の會合により賃銀を高くするを戒めた事もある。然しこの決定も法制通り行はれたとは思へない。次に事實上の賃銀については宿の人足等

大體年を遡つて高くなる傾向を有つ。妙心寺の記録に徴するに職人の賃銀はもみ米の量を以てしたものが寛永頃からは錢に代へられ且少しづつ高くなつて居るがもこよりこれのみで當代の總ての場合と見る事は難しい云々。

例會 六月一日(金)午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催。出席者は三浦教授其他二十九名、次の如き講演があつて十時半散會した。

山崎闇齋の神道觀について 浦上 清市君

先づ闇齋の生立を説き其僧侶生活より儒學を學び排佛となり更に神道に進みし經過を尋ね、次に其神道に關しては彼以前の宗教界の情勢が神佛習合及び神佛儒三道習合なりしに對し彼れのそれが神儒の習合でありその學脈は伊勢流をもこゝし卜部流を加味せるものなる事を述べ、進んで其神道説の内容に入り諸冊二尊國常立神三種神器等に關する彼れの思想と二元の説を述べ、其説は遂に祈禱を求めて宗教に入れる事を論じ批評を加へた。

大久保利通の外交策について 田中 一三君

先づ利通の守成の人たるを説きて本論に入り、征韓間

題に於て彼れは西郷等の征韓論に對し内治財政國際上の立脚地から反對したのは至當の事と思ふ。樺太境界問題では露國の野心を看破し自身渡露解決を望んだ。而して彼の面目を最もよく示す臺灣問題では大隈と共に清國との關係琉球の事業を研究し、征臺論可決されてその準備中英國の詰問に遇ひ政府の中止の命を傳へたに反して西郷從道の逸早く兵をのせて出帆せしむるや、利通自身北京に使して問題を解決せんとし朝議の戰を覺悟せるに對し自ら平和の局を結ばん意を決して行き、三箇條を提げて談判し遂に條約の締結に成功したがその條件の大なる利あらざるを不服とするものもあつた、而も今より見れば利通の外交方針は當然であつて、彼れの苦心は諒さすべきである云々。

東京見學旅行談 文學士 藤 直幹君

最初に五月五日六日兩日に互つて開催された史學會大會の公開講演や總會及び國史部會の經過、及び松平子爵家の陳列品に對する所見とこれに對する感想を述べて會員殊に學生に一種の感銘をあたへ次にその歴訪せる内閣

文庫東洋文庫及び無窮會文庫の知見について印象深く述べられた。

例會 六月二十九日(金)午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催す。會する者三浦教授中村助教授其他三十八名。次の如き研究發表があり十時散會した。

鎌倉時代の武士道について 下川 秀樹君

先づ我國の武を以て立ち王朝時代に入つて文が重ぜられ武士は源平二氏の如く地方に根據を有つ事となつたことを説いて本論に入り、其の武士道に經濟關係及び恩惠關係の如き實際的必要に起り、賴朝泰時等によつて振興されやがてそれが社會的道德習慣となる。その特色は武士の無學なる爲卑近な道理に基き具體的には忠節孝道廉恥勤儉武勇敬神にありしをその例を挙げ更に鎌倉武士の言語と氣質との關係を説き、理論的にして義理を基とする徳川時代の武士道との比較を以て結んだ。

ペリー來航時代の國家意識 向居 淳郎君

近世の露國の横暴と英佛戰爭の極東一の波及とが攘夷論を惹起しそれが一時緩んで再び起らんとする時ペリー

は來つた。當時外國の刺戟によつて起つた國體觀念は國思想從つて祖國禮讚の思想、外國への仁義思想及び我國の特長たる武勇觀念であり是が對外感情に對して種々に働いた、ペリー來航の時幕府より徴せる意見には開國攘夷の二論に分れたが而も國家の安泰を思ふは一であつた。次に當時の國家意識に影響のあつたのは露國とのフエイトン事件後は英國の事殊に鴉片戰爭であつた。其後露國に對しては好感情を有つ様になるが猶侵略への注意を怠らず、其結果ペリーの拒絶となつた。海外貿易に關しても奢侈と不利を理由とする反對論もあつたが贊成論もあつた、是亦何れも國家の安きを思ふ者である云々。

身代の語源について 文學博士 三浦 教授

身代は古く「ムカハリ」を訓み身の代の義に用ゐられ債務の擔保としての人質をいつたものであるとて貞永式目新篇追加に收められたる債務と身代と流質との規定につき説明され、債務履行の最後の手段としてこの人質の許されたところから自然後世になつて身代が財産全部を意味する身代に轉じたのであらうと其徑路を述べて橋本

氏のドチリイナ、キリシタンの研究中に提出された進退の轉化説を批評された。

●西洋史讀書會

例會 三月一日樂友會館に於て開會。故坂口教授追悼會、並びに本年度卒業生送別會を兼ね、菅原文學士以下二十三名出席。しめやかに故教授を偲び、尙、今後の方針等について懇談した。

例會 五月二日、新入會者歡迎會を兼ねて、樂友會館に於て開會。植村助教授以下二十八名出席。左の紹介があつた。

Ludwig Gumplowicz; Geschichte der

Staatsleorien.

文學士 菅原 憲君

本書が單に歐洲の政治學説のみならず、印度、支那のそれにもわたつて、汎く諸學説のよつて起つた背景を述べ、又主要なる部分は、各學者の原文を擧げて、巧みにまごめた便利な著書である、こゝを紹介した。

例會 六月二十日樂友會館に於て開催。植村助教授以下二十二名出席。左の紹介があつた。

キクロの國家觀とその時代 井上 智勇君

Cicero: De Republica, Cicero; Office及びRastorzely; Social and Economical History of the Roman Empire等によつて、キクロの國家觀を論じ、彼の要求する所は啓蒙的な唯一人の下に統御さる、政治組織であつて、彼の國家觀は一般に考へらる、如く「保守的」なもの云ふよりは、むしろ「漸進主義的」であると論じた。

W. Lecky; The Political Value of History.

文學士 原 弘二郎君

本中書に含まれてゐる、歴史研究家及び一般讀史家に對する警告助言を紹介した。

●民俗談話會

第四回例會を七月五日學生集會所に於て開く。田中俊次氏の祇園會の談話を聴く。即ち八阪神社の行事に疫神祭として祇園御靈會なるものが行はれたこゝより種々の山及鉾を樹てたこゝ。山、鉾の數や種類に及び、古今變遷あるも現在では南北兩方に二十八本を立て、其經費は各町内で負擔し市よりは鉾に對して參園、山に對して壹

會 報

圓の補助をなす云ふ。慣習の話ありて各銚切符入式、車掛式、神輿洗のこ銚銚には釘を用ひぬ話なきあつた。なほ會員は七月十六日宵山の日に田中氏の案内で函谷銚放下銚船銚に登つて説明を聞いた。

七月七日には華族會館分館の厚意によつて七夕蹴鞠の見學をなし、同館の岩佐氏より蹴鞠に關する説明があつた。

第五回例會を八月七日の夜、知恩院山内繼志學寮に於て開く、井川定慶氏より隱岐島の珍談をきく、同島の隱岐氏は玉岩酢神社の社司にして同家の長男は代々何れか一方の片目が悪い云ふ話なきあつて興味が深かつた。

八月二十七日夜、修學院村に出かけ大日踊をみる。踊は酒を振舞ふ儀式に始り、にわか踊、題目踊、紅葉音頭の順序で進む。なほ當夜は西村老人より大日踊の舊慣を會員の質問に答へて話して貰つたのは嬉しかつた。

●寄贈交換圖書

社會學雜誌	五〇、五一、五二、五三	日本社會學會
史學雜誌	三九の六、七、八	史學會
史蹟名勝天然紀念物	三の六、七、八、九	同保存協會
國學院雜誌	三四の六、七、八、九	國學院大學
歷史地理	五一の六、五二の一	日本歷史地理學會
考古學雜誌	十八の六、七、八	考古學會
人類學雜誌	四三の五、附錄五、八	東京人類學會
佛教美術	第十一冊	佛教美術社
龍谷大學論叢	二八〇	同論叢社
地理雜誌	一の一	國立中央大學地學系
史學	七の二	三田史學會
民族	三の六	民族發行所
經濟論叢	二七の二	京大經濟學會
伊豫史談	五四	同史談會

日鮮史話第四編(松田甲述)

朝鮮總督府

京都市下京區新町通り御前通り下ル淺井兼三郎方

國史教授資料 第三輯

名古屋温古會

西本 浩文氏

史學會々報 七

神宮皇學館史學會

(右紹介者 西田直二郎氏)

天神信仰と國民教育

武岡 豊太

京都市下京區東福寺栗棘庵内

倉光 活文氏

近世日本演劇の源流(原田享一著)

至 文 堂

(右紹介者 那波利貞氏)

T'ouung Paoc(通譯) No. 5 Vol. XXV.

Paul Pelliot

滿洲奉天滿洲教育専門學校内

道永啓太郎氏

● 會 員 動 靜

■ 入 會

東京市小石川區關口駒井町豊山學寮内

鷺津 亮雄氏

(右紹介者 田中善一氏)

東京市外上戸塚八六八

樽本 義一氏

(右紹介者 十河佑貞氏)

東京府下王子町大門一二四九笈掛武之輔方

龜井彌三郎氏

(右紹介者 辻善之助氏)

滿洲奉天滿洲教育専門學校内

入江 久夫氏

(右紹介者 吉原好入氏)

同

(右紹介者 横地得三氏)

上海東亞同文書院内

小竹 文夫氏

(右紹介者 浦 廉一氏)

■ 退 會

黒井治德氏 武内義雄氏 永田大二郎氏 藤井乙男氏

■ 逝 去

篠原智雄氏

右謹みて哀悼の意を表す